

がむしゃらさ 「その先」へ導く

学生記者 竹田響（総合政策学部4年）

日本学生支援機構による「平成27年度 優秀学生顕彰 社会貢献部門奨励賞」を2015年11月に受賞した。

自分のことを一度も優秀と感じたことはない。やりたいことしかやってこなかった私が、このような栄に浴したことをとてもうれしく思うと同時に大変恐縮している。

大学入学のころから『平和構築』という分野に関心があった。ことあるごとに、そう言ってきた。一口に『平和構築』と言っても、関心事が武装解除にあるのか、紛争後の社会開発なのか。具体的に絞ることが全くできないでいた。

最近になって、『民間同士の交流』に傾注していると分かってきた。一学生の私を受賞するに至るまでの経緯を4年間の学生生活を振り返りながら、少しばかり紹介させていただく。

入学当時は中東に関心

2012年4月、入学当時は中東地域に関心があり、アラビア語を勉強して、現地の人々の暮らしを知りたいと思っていた。

高校生のころから「国と国を繋

ぐ仕事がしたい」といった漠然とした思いはあった。メディア映像を通じ、白いテントが並ぶ難民キャンプで暮らす人々を見て、「難民支援をしたい」と言っていたのであるが、現地で戦争状態がなくならない限り、住民の暮らしは改善しないし、支援者・団体も現地入りできない。

こうしたことから、自分はまず安心安全な暮らしができる状態を創る側に携わりたい、と思うようになった。「難民支援」から「平和構築」へと関心分野が変わっていった。

入学間もないころは、授業をほぼ面白くないと感じ、さりとて“新歓”にワーワーと参加する気にもなれなかった。

1年次5月には「学外に出よう」と思うに至り、必修科目を受講した後、外務省、国連児童基金(UNICEF)、国連大学などが主催する各種セミナーや講演会に出掛けていった。

2年に進級する際、ふと考えた。「講義などいろいろ受けてきて、証明書はいっぱいもらったけれど、受けっぱなしになっていて自



アフリカの地で、学生記者・竹田響

分の身にはなっていない」

今度は、実際に海外の現場をこの目で見てみたい、との思いに動かされた。夏休みにガーナ、トーゴ、エチオピア、ラオスに渡った。しかし、「国際協力」「開発」「平和構築」といった大きなワードだけが頭の中に残り、何がやりたいのかは全く分からないまま。がむしゃらに動いているだけだった。友人らによる私のイメージは「あちこ

ち行っているみたいだけど、何をやっているのか分からない人」。

アラビア語は2年次まで履修した。言語が非常に難しかったのに加え、英語も日常会話の域を超えておらず、勉強の優先順位をアラビア語から英語に戻した。3年次からは履修しないという選択をした。

「平壤、行けるんですか」

総合政策学部では3年次からゼミが始まる。中東に関心があり、イスラム社会思想を学ぶゼミに所属した。

一方で、N G O (非政府組織) という組織にも関心を抱き、インターンを志望。1年間「(特活)日本国際ボランティアセンター(J V C)」で活動現場をつぶさに見た。

希望はパレスチナ事業だったが、配属されたのは宮城県・気仙沼事業。震災復興にN G Oの視点から携わった。

5月には北朝鮮の平壤へ渡航した。J V C事務所で、スタッフの一人が「平壤に出張に行く」こと

を耳にした。「え、平壤って行けるんですか…?」と目が点になった。その後「夏に平壤で両国の学生が交流する。行ってみるかい?」という話になり、「行きます!」と二つ返事で答えた。

2014年8月に首都・平壤に降り立った。平壤外国語大学で日本語を学ぶ学生との学生交流、同世代の在日コリアンとの出会いを通じて、日本と北朝鮮、民間交流を強く意識するようになった。

それまでの中東から思わぬ形で朝鮮に関心が移ってしまい、4年次には無理をいって朝鮮研究のゼミへの移籍を認めていただいた。2015年8月に再び訪朝。卒論は『日本国と朝鮮民主主義人民共和国の相互理解の可能性』をテーマにした。

ただ「がむしゃらに動くだけ」の生活を送っていた私が「朝鮮」に注目するようになったのは、本当に“縁”でしかなかったと感じている。

平壤行きがきっかけとなり、民間交流の視点から平和構築を考え

るようになった。そんな中、日本学生支援機構の優秀学生顕彰に出願し、情報工学やスポーツなどと並ぶ分野の「他者理解」に貢献する学生として選出された。

とりあえず、やってみる

自分の関心が何か。何をするのか。分からないのは、とても辛い。しかし、がむしゃらに何でもトライしてみると、その先がふと見える時がくると思っている。それが私の場合、「平壤に行く」ことで巡ってきた。

今はよく分からなくても、とりあえずやってみる。そこからチャンスがやってくる。そう思っている。やってみないことには何も始まらない、セミナー、講演会、プログラム…。すべてに自己研さんにつながる「出発点」がある。

本稿を読んでくださった学生の皆さんは、面白そうだなあ、と思うものにぜひ参加してほしい。

私も好奇心を忘れずに、これからも勉強を続けていこうと思っている。

やってみはなれ やらなわからしまへんで

(サントリー創業者・鳥井信治郎氏の口癖)

日本学生支援機構・優秀学生顕彰

経済的理由により修学に困難がありつつも、優れた業績を挙げた学生・生徒に対して、これを奨励・支援し、21世紀を担う前途有望な人材の育成に資することを目的としている。

平成27年度は全国から114人の応募があり、60人が入賞した。

竹田さんの受賞理由は次の通り。「相手を想像できる社会を築くために行っている分断状態にある日朝の大学生交流、全国最大規模である横浜市の成人式実行委員長、東日本大震災被災地の復興支援、将来の平和構築に向けた学問・実務両面での積極的な学習」



優秀学生顕彰「文化・芸術分野」では、中大商学部4年の吉本悠太さんが受賞した。吉本さんは将棋のアマチュア日本一を決める「第28回アマチュア竜王戦」大会史上最年少優勝。「第42回学生王将戦」優勝者でもある。



吉本悠太さん

